付録

「経営論集」100 号のあゆみ　――巻頭の辞をたどる

参考：「東洋大学経済学部 50 年史」、「東洋大学経営学部開設 50 周年記念誌」、「経営論集」
「経済経営論集」各号、「東洋大学広報」、「東洋大学 100 年史」（部局編、資料編Ⅱ）
文中の〔写真〕は P.263 を参照いただきたい。

「経営論集」100号のあゆみ　――巻頭の辞をたどる

「経営論集」誕生の経緯

1887（明治20）年に私立哲学館としてその前身が創設された東洋大学は、本年で創立136年を迎えるが、長らく文学部のみの単科大学であった。社会科学系の学部は、戦後の教育制度の改正とともに総合大学化を目指した過程で生まれたもので、第2番目の学部となる経済学部は1950（昭和25）年に誕生した。そして1950～60年代にかけて、経済学部内に経営学科、商学科が設置された。これが経営学部の前身となる。

このため、経営学関連の機関紙、新聞等の学内媒体、そして現在に続く「経営学会」なども、もともとは「経済」を名乗っていた。紀要（論集）についても、経済学部発足時には「経済学紀要」との名称であったが、1号限りですぐに廃刊となり、「経済学論集」に名称を変更した。この第1集の巻頭には、発刊の辞として、次のような一文が掲げられている。

……遇々、日本の経済学会は、漸く、第二次世界大戦による理論的研究のおくれを取り戻し、実証的部面に於ては、賠償問題、金融問題、新しき企業経営の問題等々、我々の理論的研究の成果を以て解決さるべき問題は、実に山積している……　　*経済学部長　松本信次*

「経済学論集」発刊時にはすでに、「経営」の名をあわせて付すべきとの思いがあったようにも見受けられる記載があるなか、これから3年後の1957（昭和32）年には「経済学論集」から「経済経営論集」に改称され、年1回から年4回へと発行回数が増えた。そして、1966（昭和41）年には大学附置研究所として「東洋大学経済経営研究所」が開設された。

その頃、経済・経営・商の3学科で構成されていた経済学部の入学者は年々増加の一途をたどり、一時期は、経済学部の学生が5,000名を超え、東洋大学全体の半数以上を占めたとの記録が残る。さらに、多くの私立大学で経営学関係の学部学科の増設が相次いだことなどを背景に、本学においても1966（昭和41）年に経営学部の開設へと至ることになった。

経営学部の開設後も経済学部とともにあった「経済経営研究所」の機関誌「経済経営論集」は、1975（昭和 50）年までに計 76 号を刊行してその幕を閉じた。「経済経営論集」第 76 号の巻頭には、2,000 字にわたる閉刊の辞が記されている。

……こうしてみると、ふたつの体制におけるカリスマ的な理論家の予言ははずれ、いずれの体制の側においても、公式論的な固定観念を脱却し、あるいは、敵対的であったはずの両体制の理論的接近によって、それぞれの自画像のデッサンの完成を求めて歩みつつあるのではないだろうか。本研究所所員の総意はこうした理論前線の動態的傾向を敏感にとらえ、昭和 50 年 3 月末をもって発展的に閉鎖し、同年 4 月から経済学と経営学に関するふたつの「研究所」を新しく発足させることにした。これは一見、公式論的には学際的な、とくに隣接科学の交流や共同研究が提唱されている傾向に対して逆行するように思われるかも知れないが、専門分野におけるより精緻にしてユニークな研究が達成されるためには、より専門的分業が当然許されてよいと信ずる……

経済経営研究所所長　小林端五

こうして経済経営研究所は、経済、経営それぞれの研究所に分離され、1975（昭和 50）年、東洋大学経営研究所の創設とともに「経営論集」が発刊された。

……「転機」という言葉がある。戦後の日本経済に限ってみても、随分、しばしば使われてきた。ガルブレイス（J.K.Galbraith）の「豊かな社会」とか、ローマクラブ委員会の「成長の限界」など経済の高度成長への警告が、今日の一大転機の機運を醸成してはきたが、1973 年の石油ショックは国際的にも国内的にも、文字通り「転機」を招来した。わが国、経済の呻吟も久しいし、企業の倒産も大型化してきた。かかる時期に、本研究所が新設され、「経営論集」創刊号が刊行されたことは、まことに意義深いことと考えられる……

経営研究所所長 山内惣市

これは「経営論集」創刊号［写真 2］の発刊のことばの書き出しである。のちに経営学部長を務めることにもなる初代経営研究所所長の山内教授は、1955（昭和 30）年に経済学部の講師として着任し、専門が小売マーケティングであったため、商学科目の目利きがあるとして、経営学部開設に向けた設置準備委員に任命されて奔走した一人であった。

学問的に経済学と経営学が分離され始めた頃のさまざまな思いが、経営学部開設前後のいくつかの論集の「辞」に残されている。

今日に至る『経営論集』

その後、研究所は全学の施策によって数度の再編があり、外部資金獲得に伴う新たなオープン・リサーチ・センターが誕生するなどいくつかの変遷を経たが、「経営論集」は経営学部の紀要として、年 1〜2 回の刊行ペースを保ちながら、2023 年 3 月号で 100 号を迎えた。これまでを振り返ると年度末に当該年度の退職教員記念号、在任中の訃報にあたっては追悼号、周年時には記念特集号などを組んでいる。2011（平成 23）年には未曽有の大震災に思いを馳せ、東日本大震災特集号と題したこともあった（第 78 号）。以下、定点における「辞」の記録である。

「経営学部開設記念特集号」［写真 1］
（1966（昭和 41）年 10 月　※このときは「経済経営論集」第 43・44 合併号）

……わが経営学部は開設当初から業界の協力を経て、研究を進め、人事の交流をはかってきた。たとえば、最新型の電子計算機を受け入れ、業界における切実な問題意識と豊富な資料に接する機会をつくり、研究の自主性を堅持しながら他学部と提携してすでに数種の共同研究に着手した……

経営学部長　岩間　厳

「経営論集」経営学部創立 10 周年記念特集号［写真 3］
（1976（昭和 51）年 12 月）

……たとえば、わが国の経営学の研究は、一方では欧米の経営学の移入・紹介を通して、他方ではビジネスのための高等教育を媒介として発展してきたといわれている。しかし、異質の歴史的諸条件のもとに成立した学を移入したとしても、それが、経営学に限らず、そのまま日本の土壌になじむものではない。このような事実が一般に自覚されはじめたのは、ごく最近のことであり、この 10 年足らずのことであったといってよい。そして、我が国の経営の特殊性もしくは優位性を認める新しい経営研究が、今後の大きな課題として提起されている……

経営学部長　菅野康雄

「経営論集」東洋大学創立 100 周年記念号［写真 4］
（1988（昭和 63）年 3 月／第 31 号）

巻頭言の掲載はないが、大学創立 100 周年の学部企画として、経営学部では市民大学講座を開催し、海外や学外からの講演者を招いた。論集には記念講演報告論文とそれを受けた経営学部教員の見解報告を掲載している。

「経営論集」経営学部創立30周年記念号［写真5］
（1996（平成8）年3月／第43号・第44号）

……マルチメディアを中核とした情報化社会の進展や、終身雇用制をはじめとした日本的経営システムの崩壊がしきりと取り沙汰されているように、現代の経済社会が急速にまた激しく変貌を遂げているのは紛れもない事実として認識できます。そのような状況にもかかわらず、それらの変化には底知れぬ混沌とした不透明さが漂い、従来の志向の枠を超えた多くの解決困難を提供しております……

経営学部長　穐山幹夫

「経営論集」（2010（平成22）年11月／第76号）［写真6］

現在の装丁となったのは第76号から。この頃からリポジトリへの掲載も始まり、インターネットでアクセスしやすくなった。

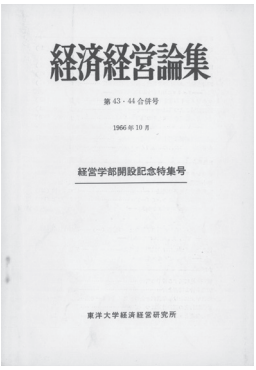
学部開設50周年にあたる2016（平成28）年3月の第89号では、学部開設50周年の企画として開催した、記念講演会の講演録を掲載している。論文は「経営論集」内ではなく、論文集「現代経営学／マーケティング／会計ファイナンス／研究の潮流」のタイトルでまとめ、記念出版した［写真7］。以下は出版書籍内の辞である。

……経営学部とひとことでいっても多様な研究が行われています。その先端の視点により研究をまとめることによって、現在の経営学の研究領域の広がりや多様性を示すことが可能となるはずです。それらによって、現実の課題への解決の糸口を提示できるものと信じております。今後、経営学はさらに広範な問題を取り扱い、発展を遂げていくものと思います。その道標となることを期待するとともに、我々の手で次の道標を構築していきたいと思っております……

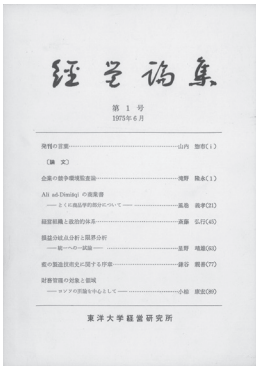
経営学部長　長島広太

これまでに10号、50号…といった刊行号数の区切りで特集を組んだ事例はない。本論集が100号に至ることを推測した記載も見受けられない。それぞれの「辞」が記された、それぞれの時代には2020年代の世の中と大学をめぐる状況がどのようになっているのかなど、思いもよらなかったであろう。

1966（昭和41）年に開設した経営学部は、57年目を迎える。2023（令和5）年刊行の「経営論集」は101号から、3桁の号数を刻んでいく。

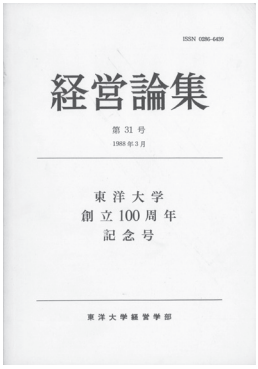


1



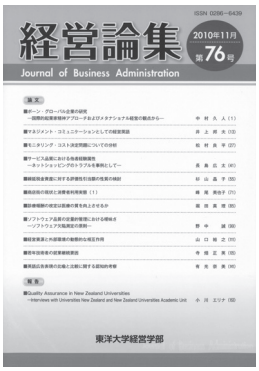
2

3



4

5



6

7

1　初代学部長の岩間 厳教授は当時の大学報に「論集の出版がさかんで、不足がちの予算の追加財源の確保に、喜ばしい悲鳴をあげているほど」と記し、新学部の張り切りぶりを伝えた。
2　「経営論集」第1号。6編の論文が掲載された。
3　特集号のためか号数が付されていない。外函が付き、学部創立10周年記念ならではの装い。
4　当時の学部長、涌田宏昭教授はこの号で「経営学教育での大学教授法序説」と題し、他大学の履修要覧をまとめた研究ノートを掲載した。
5　合併号としながらもそれぞれを製本、こちらも30周年を祝した外函付きの豪華版。
6　第76号から現在にほぼ近い装丁に。研究所の再編、研究センターの発足などと相まってこのデザインが採用された。
7　経営学部開設50周年記念として中央経済社から出版。特装ケースには東洋大学創立125周年を機に完成した白山キャンパス8号館の外観写真を入れた。経営学科編、マーケティング学科編、会計ファイナンス学科編、と3冊に分かれている。